茶道筌蹄　四

459

茶道筌蹄巻之四

目録

水指
杓立
蓋置
茶入
棗
塗物作者
薄茶器
同盆
袋切　表具切

茶道筌蹄巻之四

○水指之部

○唐物　抱桶　天竺　西瓜金　モウル金

○古染類　雲龍　砧　天竜寺　七官

○南蛮物　縄簾　但し横簾　竪簾

冬寒　海老(エビ)ニ似たる抱手ニて先絵書付ニ冬寒と有り此手といふ数山房御不審なり

メ切　南蛮抱横ニ筋

南蛮芋(イモ)頭　碗の手ニて口の広さと三谷宗鎮手始の茶ニ据てハりなる代原叟太箸(フトバシ)と銘し後ニ此を次

朝鮮芋頭　同細　同平　啐啄斎好割蓋黒塗張の

蝶ツガヒ裏ニ金の立浪

海老手　耳ニ海老有りたるも有り

不識　利休所持の物ハ友蓋なり少庵宗旦宗全宗也
中ごろ浅井氏後尾州大野濱嶋傳右ヱ門へ伝へ此外ニ
元伯銘の不識とて有り是ハ不識の始なり山中氏
所持原叟好の盃乃蓋有りブセウモノ不働乃二銘
有り不働ハ於山房御所持フセウモノハ浪華今宮
宗子所持なり

○染付　古染付　虫喰手

○祥瑞

○呉洲

菱馬　御本手等類の下絵なり又團扇の内ニある二疋と
一疋と有り共蓋竹の節のツマミ有り

○井戸　擂盃ニ限ず摺鉢の形なり

○紅毛　○宋胡録　○絵高麗　○安南

○同和物金類

渦（ウヅ）　原叟好大西ニ為清作ル家所持なり後ニ如心斎写し
数二十有り浄益作なり

廣口　舟の形ニて雲耳花生ニ兼用塗蓋也○花入ニ用
ゆるときハ共金の花クバリ入如心斎好細工人堺作

釣瓶　利休所持塗蓋花入ニ兼用花クハリ有り山中氏所持

茶鑵　利休所持少庵元伯原叟へ伝来浪華　油屋

彦三郎より近江屋休之傳へ伝来則當時に於て之 備同氏 といふ

○同土物之部

○瀬戸 黄瀬戸 ○高取 筑前 ○薩摩 ○伊賀

○信楽 ○備前 ○伊部 ○唐津

○萩 丹波 ○宇治

○仁清 仁和寺村清助を略して仁清と云

御室焼ともいふ

○乾山 光琳の弟を云尾形二者鳴滝村に住せる故乾山と号て京より乾の方なれば也

○同塗物之部

真手桶 紹鷗好江岑箱書付ある是山中氏の持應之朱

して大黒庵と云り元来ハ臺子の水指なり竹臺子よれ合せハ紹鷗なり又江岑方棚よとり合せる原叟なり風炉よける一口足と向なれ平手茶巻炉風呂とも一口足と茶よる次なり

朱手桶 朱ニ銀の輪江岑好ハ内黒塗なり

黒片口 利休形なり朱地の大の方と絵朱地にして黒塗なし小振ハ紹鷗好なり

海松貝片口 原叟好なり外溜内黒金と朱にて海松貝の蒔絵なり

○同木地之部

曲 利休形に少庵足を付る有り胴のトジメる茶蓋乃

トジメ無き向ふなり風呂には不用

菜の絵　利休形なり　正親町帝へ進献の内

釣瓶　利休形桧の木地柾目 ○ 松の板目は妙喜庵形なりも利休形

○同楽焼之部

福の神　仙叟好元総銘は元ハ大樋焼アメ薬共蓋

舟虫　常叟好なり赤共蓋

鐘樓堂　元はノンカウ作アメ色薬落込ミ蓋是は原叟写しを左入に造らしむ数の内二十個

竹の節　原叟好数の内左入作赤共蓋宗原家御茶碗開きの茶乃好なり後に蓋を如心斎カとナメに好む

飴(アメ)薬丸　アメ薬塗に篦(ヘラ)目有り内銀溜蓋桐の一文字黒

掻合せ　原叟好数二十之内左入作なり

梔子(クチナシ)　如心斎好左入作赤一閑張へギメ蓋箱表長入宗判如心斎書付有り数の内なり元来ハ利休形の水指全の水指と写し替へたるなり　但し水指を造り直して左入卒に其後箱表書付ハ長入筆なり　利休形水指全の水指ハ当時平野車屋に所持なり

手付　元総好茶を依しを共蓋白なりこるするて塗蓋とも蓋も有り

黒筒　一入作なり千家所持なり　是ハ共蓋なし

○抜立之部　古名ロシヤク立

⊙唐物金類

○手桶 桶の手乃本手斗なり此形なり
似たる手桶を桶とい ふ衣を擣つ槌に似たる
也となり
○金襴(ラン)手 瓶子に限る瓶子とハ手口の付たる徳
りよう子家にハ用ひる事不好なり
○交趾 絵定まらず
○染付 同
○祥瑞 同
○同和物之新金類

四葉桃底 小八原叟好 大るぬ兼好 大臺子ニ用ゆ

○瀬戸 ○黄瀬戸 ○唐津 ○楽焼 皆く写し物也

○蓋置之数

火屋(ホヤ) ホヤ香炉とかり用ゆ

手桶一閑人 元来香炉なり紹鴎好名書付に手桶天炉

一閑人といふ何ぞの間ちりてフタとなる

同 無閑人 人形のなきを以ふ

同 三人形 唐子三人手を組合せたる形

同 夜学 是四ツと五ツといふ

糸捲の撥子 一閑人のごとく人形の肩が撥子になる

染付三方 竹の節

祥瑞 絵定まらず

交趾 同

○和物蓋類

尖屋　一閑人

栄螺(サヾイ)　大なるハ用ひし小ハ唐金利休所持

三人形　利休所持原叟書付にて和物なり色赤し

作者(喜平次と称ス)当時ハ浪花殿村平右衛門所持なり

五徳　開山五徳とよぶハ紹鴎所持台子ハ切懸無釜也人

いにしへ人ハ多く五徳を用也　作ハ宗良之

印　東山殿隙濟禅沙の銅印を御用ひられしが始なり

蟹　筆架を御用ひしが始なり

輪　唐物に法しなり

禅鞠　坐禅の時頭に戴(イセ)る具なり眠れハ卑なるを驚(エキ)醒(レイ)之

瀬戸　利休所持志野の銅といふハ百会ニ出ル

楽焼　ツク子原叟手造輪赤五徳黒と一双ニて入数五十の内

円穂屋　啐啄斎好是ハ二ハ内金弥助作

円栄螺(サヾイ)　同く斎好赤内金弥助作今ハ了入ニもあり

竹　青　白　紹鴎好なり節合を切一寸三歩なり元水屋の具なりしを利休一寸八歩に改め中節を上節とを製して道安と少庵ニ人ニ贈る其上ニ節あるハ少庵ニ送り中ニ節あるハ道安ニ贈られしなり是よりして席ニ用ひ来る炉にハ中節風炉ニハ上節と定む少庵が元伯ニ伝へし元伯より加州利長公へ献ぜし時の御秘蔵の品といへり白竹と判るも用ゆるなり啐啄斎判あれども用也

○茶入之部

唐物

往古ハ唐物のミを用ゆ其内茄子を上品とし
肩衝(カタツキ)文林是ニ次く此二品とも盆点ニ用ゆ
其後ハ少く成し坂丸肩衝なとも用ゆ

肩衝(カタツキ)　偽物去列ニ云　名物記ニ出たる八三十餘も有り南記松屋ハ肩衝八世ニ名高し詳見も雖ふしけれども少なからす見ることよりて其外ハ貴人方ニ蔵め玉ふ品ハ拝見さゝふ事難し

茄子　むかしより賞翫格別なり

ツクモ　似　松本　円坐　出雲　小茄子

富士　紹鴎　北野　国司

是等茄子の名物なり尻張ハ茄子と相混(コレ)し易(ヤス)し
肩の丸きハ茄子肩の張出たるを尻張なり

文林　博多　楓　玉垣　香井　笠屋　紫窓

本能寺　丸屋

是等文林の名物なり

名物唐物の茶入数多く有りといへとも大方ハ右の二三品なり

文茄　名物記ニ小出伊勢守殿御所持ブンナと有り

丸壷　利休　金森　立花　寺沢

尻張　大尻張　利休尻張

大海　内海　鶴首　樹　達广　絣羅　物相

木葉猿 利休所持之　利休百會に用ひられし茶入なり

高サ一寸八分　口八分四厘　胴二寸　底一寸

右木葉猿は箱の裏に木葉猿の蒔絵あり紀氏長

御所蔵なり

廣口　飯銅　瓶子　樽　耳付　累坐

瓢箪　上杉 紀州御物　南木　驢蹄　尭陸常

鞍鐶　胴高　注滴　水滴　手瓶　弦付

○東呉 地名なり

○西呉 同

○呂宋 同

○島物 地名此分りかたきをいふなり

○和物之部

古瀬戸　藤四郎入唐前を古瀬戸といふ。○口禿(ハゲ)。○厚手

○擂座 此二品に限る皆瓶子なり後道元禅師

入唐の長陥を渡唐し底を下よしと焼ける也学び

来る故日本にても掛目胴も能く出来るなり入唐中ぞ八

焼様の瓶辣もなく口を下すしを焼し也人其口禿(ハゲ)を

茶もかはらず胴も行しく手厚に細くこと藤四郎

と無加藤四郎左衛門と号しをいふなり○元来八慶系

禅師唐土より茶を持渡り鎌倉實朝公へ献ぜし也

頭痛平釜(ヅツウヘイユ)ハ一名ひし也紹鷗諸家へ茶を分チ給ふ其茶の入れ物に焼たるが始りなり茶入にて大小あるハ茶を分ツたり　釉跡ある故なり

古瀬戸名物之分

筒井　行き池　中川　山河内

松花　忘人ら坊　松井　鎧の袖

釣舟　東中庵　相坂　島山

胴高　破衲　鶺鴒　鈴木

吉光　浅野　平野　福島

六条肩衝　淡雪　山の井　可中

平手

小瀬戸　是ハ大窯(カマ)の手小窯の手と云ふ事なり

○藤四郎入唐後ハ唐物を以て焼たれども甚疑ハし

春慶　春慶ハ藤四郎入道しての名なり

口瓢箪　夏山　濡茶　朝日　蒸餅手

真中古　二代目藤四郎　丸糸切　本糸切

橋姫　野田　大瓶　小川　思川

面取　不面取　大覚寺　柳藤四郎

糸目藤四郎　盛面　花藤四郎　蝋燭手

貯月　藤四郎春慶　塞(コヽキ)　〆切

金華山　二代目藤四郎中古物と云　丸糸切　本糸切

大津　飛鳥川　玉柏　二見　滝浪

生海鼠　落浪 黄薬あり　盤余野　真如堂
廣沢
破風窯　四代目藤四郎　本条切　九条切　葉満り破風よ寄る
みなせ川　音羽　藤　市場　廣口
渋紙のツマミ座　擂粉木　黄薬物　橋立
九　玉川　正木　茶一　桐メ　正信春慶
擂茶　堺春慶　後時代春慶　吉野春慶
後窯　九条切　本条切　四代目藤四郎より後を後窯といふ
坊主　山道　娟　利休　鳴海
織部　捻貫　八ツ橋　伊勢手
○京焼之部

宗伯　正意 眼医者なり　茶臼屋 名を小玄清
此三人紹鴎時代なり
源三郎　新兵衛 姓浦井　江存　藤右衛
吉兵衛 姓別不　千家所持八名物第
萬右衛門　落穂といふ名物あり千家所持なり
遠州公の命にて
あつひとく落穂ひろふてといひけるをは
これも内面よりゆの滴しのみを
仁清 仁和寺村 清助なり
此六人は利休時代の人なり
東福門院より宗旦拝領ありし今
日用に不持て（仁清）此印あり（大仁清）如此マク印もあり

又ハ仁清と計もいへり何れか初代なるや可考なり

○国焼之辨

薩摩　古薩摩といふハ利休時代遠州好ニ瓢箪形を数十命ぎられを造る底ニ印十と彫銘ハ肩ニ印十といふ肥後薩摩ハ実ハ肥後焼なり

高取（蕪茶焼）　古高取といふハ太閤時代なり唐物と同様なるたゞ糸切なり

肥後　八代焼なり吉左衛門といふ名人にて太閤時代より古ハ後なり

丹波　古丹波ハ太閤時代なり○山料ハ子家に於て無之元禄山料宗甫入茶に好を遣をおかる由人名付歯

時ハ山中氏所持（今の銘山料ハ未詳なり）

膳所（近江）　遠州時代なり今ハ窯（カマ）なし遠州公の好にて焼しなり宗旦時代より古し

唐津　遠州時代古唐津ハ茶入なしいましくて茶碗のミ焼しなり

信楽　至て上作ハ新三郎作にて彫の字乃彫銘ハ但し彫の字形の様ニ見へ申なり

伊賀　新三郎の同作にて信楽伊賀とも古きハ花生水指ニ限る茶入ハ利休時代より古きハなし

備前　至て古作にて利休不持ニ布袋といふにて白地の古金襴を神谷宗湛より贈申しニ袋になるとて

布袋と號し後に袱紗合の茶杓と云ふ今も京都矢倉
九右衛門所持なり是に傚(ナラ)ひて山田宗徧茶杓の[illegible]の
茶入に名號し今布袋と號し是ハ當時山中氏所持
但し山田宗徧ハ大徳寺の行者(アンジャ)なり

尹部　備前の別所之窯(カマ)の名なり

祖母懐(フトコロ)　美濃焼なり地名を以て利休時代より古瀬戸ハ
なし　○此外手造り楽焼ハ數多くして記し難し

楽焼ハ長二郎より古きハなし

○同塗物之作者

五郎　羽田氏奈良の法界門の傍に住し更に又五郎の
作を法界門塗と云ふ羽田盆ともいふ珠光時代の事なり
五郎作に限りてハ枚の朱地桜図なり

余参　紀三　両人とも京住紹鴎時代の事之余参
作ハ蓋置の涼し聚光院に余参の没せし日を記
にあり天正十一年癸未四月十一日

盛阿弥　京住法名紹甫太閤より天下一の号を賜ふ
二代目盛阿弥より其蓋にあり三代まで續く

秀次　四代目秀次利休時代なるが名人之[illegible]

藤重　藤重ハ姓之名を藤巖と云ふ利休時代之塗師ハ
本業にあらず鍛冶に仕ふる之名人なり通坂　関東之
石出されて江戸に住し其名乱世後まで被換せし
名器の繕ひを弘　繕付其業としてツクモの茶入を

賜ハ名物なり今に藤重の家に蔵なり二代目ハ御袋
師とす其子孫今に在り（但し同字なし二代迄 後嚴（ごご）と云一代ハ後嚴と云）
宗長　関氏　元伯の塗師なり余参盛阿弥の作とハ敗
銘なり宗長以後ハ加々名に成る
元祖宗哲　中村八兵衛勇山と号す一翁宗守の聟
なり始ハ蒔絵師なりしが塗師に成ハ元来一翁宗守ハ
塗師吉文字屋甚右衛門の養子となりありし人之後千
塗師を中村八兵衛に譲（ユヅリ）て茶人となる夫より宗哲塗
師と業を次継て宗守の出所とハなり
二代宗哲　其子也法名元哲
三代宗哲　別号紹朴又漆桶又勇斎世に此人を彭（ホウ）

祖宗哲とて用ゆ
四代宗哲　別号深斎紹朴の養子初ハ八郎兵衛と云
五代宗哲　別号豹（ヘウ）斎と云
六代宗哲　初代より代々今に至るまで通称八兵衛

〇同塗物の茶器

真中次　利休形サシ渡し二寸二分高サ二寸二分小ハ
一寸八分藤重形を上形と次后重形ハ竹の木地なり
分ち塗抹木地なり
棗　紹鴎形　大中小　当時ハ紹鴎形と写す其数ハ元禄
より以降へ紹鴎の墨出すて広に判いたる大棗を茶人
入て賞る其後以降朱漆にいたるまで今一所と元禄蒔乃

裏に判を書て紹鴎へ譲られし由なり江岑の所持なり
如心斎より三井へ譲る　紹鴎所持ハ春叟より二村宗
務へ伝ふ南岡浪花木村氏所持となる之　木村氏ハ日野屋松之助といふ
盛阿弥　大　此作に至て大なる壺にて十入を盛阿弥形と云
利休形　大中小　南岡写し来る形なり
棗の蒔絵　大中　桐の蒔絵　大中　棗十六棗の内ニ桔梗
入り棗の大と桐の中とハ利休居士　正親町帝へ進
献の形なり棗の中と桐の大とハ江岑の補として伝ふ去
ども不分明なり通じて利休形といふ
甲張柳　芽張柳ともいふ　織部好本斎ハ中之紀州御茶道
中野笑紹所持なり

元伯好の棗　大　十一棗の内 如此に作り　東福門院へ献
上の壺なり　大斗なり　白山氏所持
満　大中小　大小ハ桜の木地中ハ松の木地なり内黒何
れも元伯好なり
鶺鴒　盛阿弥の作自然に少し形の變りたるを利休鶺鴒
と銘ス　一ツ乃ことくにいふ　小棗ましくて尾をあげし故山中氏所持之
此棗に似たる大棗を元伯四首と云ふ銘を付る四首ハ
鶺鴒の異名なり此棗浪花海部屋吉二所持なりしが
大火の為焼失し又大棗成紹鴎棗子と号く是れも
鶺鴒の異名之鶺鴒の子を恋とも云よせて名付たり又由之
鶺鴒に似たる四首四首に似たる棗子といふ此棗ハ山中

呂作所持なり
尻張　利休形黒の中に張るなり
平　大中とも利休形大の方をもちゆる近来啐啄
斎再興也
白粉解　中　利休形二宅亡羊所持中次なり当時も
浪花山家屋権兵衛所持なり
一服入　利休形なり
茶入台　小　仙叟好茶入にウハキ蓋あるなり
河太郎　仙叟好大封なり甲にくぼミあり了々斎好大小あり
梅絃　中　表黒内朱甲に蒔絵捻梅二ツあり松の木
地了々斎好なり

一閑折溜　啐啄斎好後藤玄乗作後に寛政年中
中川浄益紫銅にて古ある梅宮の歌を書て数
三十一閑に造らしむ
不識　了々斎好一閑ある二数二十ヶ製し折溜内黒
甲に蒔絵不識とありクリ上に判あり
金輪寺　菊大中　木地菊折溜内黒大ハ濃茶器中
ハ啐啄斎薄茶器に用也元来ハ吉野山にて
後醍醐帝一字金輪の法を修せられし時衆徒へ茶
を給ふ其ハ此山にある菊の蕾の菓器と作る故に金輪
寺茶器と云修法ある金輪ちといひしとぞ今の義
堂の側乃実城ち見るなり乾にあるを二代宗哲の写し八

京寺町大雲院の掛物あるよし大雲院ハ織田信忠公
の菩提所なり此茶器信長公御物七種の一つなり盛り
廿一と云内と云り朱の盆添ふ

一 松の木　宗旦好老松の茶器と同製数多あり外溜内
黒後よし如心斎金輪とも一宗作の割蓋甚大とも称
数五十製しを覚えて啄斎好の内とも云

一 一宗作 中　元伯好内外黒本寄ハ浪花海部屋よ
所持なり如心斎金サラサの袋紋好む

老松割蓋　妙喜庵の老松を以て宗旦数多十枚
造る其の蓋乃裏に茶器の銘に云り紙南海の作と云
記すに曰

山崎妙喜禪菴茶亭之傍有老松
枯成梢拙摘之以作茶湯珎器聊
傳遺愛於千歳而已
宗旦判あり

木地ため塗の作此茶器よ長緒緒を合へとも割蓋にし
らひの上又長緒にしらひ如何とも袋出来せず此内
帛紗包よりして用ひられし後北野天満宮へ一
七日参籠して宝と共に長緒よ定めらへしよし
宗旦高弟にて長緒中絶しをいつしか子数あまて長
緒を用ゆるものハ此茶器より始なり

○一 薄茶器

茶桶　大小とも黒ハ利休形　溜ハ元伯好

円挽溜　大一對　利休形ニて家而持ハ元伯玄付雑結と表ニ
有り蓋裏に判ある如心斎写し数々十宗哲ニ入

雪吹（フブキ）　大小とも是ハ利休形溜なる元伯好金のヒナタまで
茶桐と甲に書てあるハ大小とも原叟好溜塗なり雅なる故
雪吹といふとぞ茶桐大小とも入浪花絳あり持なり

面中次　是なる利休形溜ハ元伯好何れも中計なりタメ
中次に元伯詩と書てある所則詩中次と原叟写し有り
如心斎又数々十と製ス

棗茶器　利休形なり似叟好なる蓋河太郎あり溜とも是之

隅切　如心斎好是松の木地スリ漆是まで桐と書てあるハ
了々斎好なり

阿古陀（アコダ）形　山中宗有遺愛の桜の木を以て其子宗智天然に
茶器乃好を頼しに如心斎夏中にアコダ形の形をなさしむ
此器を好む細工成就せず形同く天然も卒る故に天然の
書付あるなし身ハ内黒外溜蓋ハ木地なり

棗　元伯好内黒甲スリ漆其余なる木地本字ハ二丹溜替

一閑張竹　折ダメ　如心斎好竹なる蓋の内返しに判有り
折タメなる底に判有り竹とホウをといひ折タメをカツラと云
今まてハ竹の茶器折タメの茶器といふ

○茶入盆之部

若狭盆　此盆元七枚茶入を入て若狭の浜辺に流れ寄る故
唐物の盆なり此盆に似よりたるもの何れも若狭盆といふ

内朱　外青漆茶入角なりいづれも内朱の盆と云ハ此盆之

唐物　唐物といふハ皆朱の盆の事なり

存星　名高き紀ハ松屋肩衝の許由（キヨユウ）の長盆なり　別ニ出る

堆朱　丸角とも内ニ鏡あり紀ハ茶入盆ニ不用

青貝　青貝ハ紀一定なし次

羽田　羽田五郎作矢筈盆松屋所持なり

松木　四方盆茶入去葉紹鴎より利休へ伝へ利休より今小路道三ニ伝ふ道三二字書付ニ翠竹と記す翠竹ハ道三の院号なり此松同木まで是を法とし行ふ宗旦又如心斎も製之

一閑　元伯好七子リ縁の盆なり初代一宗作子家伝来

如心斎の書付有り

黒塗　深元時代四方なり利休所持判有り子孫ニ伝来ス

八卦青貝　黒塗ニ青貝ニて八卦有り大円盆なり紀飾ニ用ゆ如心斎好宗哲製ス

黒の長盆　是ハ臺子ニ用ゆ子家の外ニハ用ゆる事成ゆるさず茶カブキ盆且坐盆も此様なれど宗旦松屋許由の盆と同寸なり

○袋切　金襴

時代の袋も下ハ年歴を記し年代詳なるならず後考とする

畠山　織物萌黄ハゲて茶の地なり丸出る所あり金ニて

大サ二寸計の輪違文空庵にあり

鶉斑　精地大中小あるも鶉斑形あり茶の大サ大ハ二寸小ハ一寸此切古きも古金襴中第一なり極上代文百年餘なり地色コキ紅なり色サメて柿色の様に見ゆる也ハクの色極コキ金なり地合あらくしてヨシ是も総紺又ウンサイ織のごとし

大蛇　上代文百年ばかり地色アカトビ様子の荔枝(レイシ)紋五ヶ目に居(スワ)る

長楽寺　上代五百年ばかり地合地色大蛇に同じ但し紋の内七ツ星又小菊の丸あり或もあり又総色地もありといへり

二人静　色濃紅の糸にて織る地紫地に見ゆる尾長鳥二羽の丸大サ九分程

雲山　紫地七ツ星雨龍

逢坂　上代文百年ばかり地色赤トビ文様色もあり大蛇の色と同じ紋長楽寺同様なり逢坂丸壺乃覆の切なり

上新　上代五百年計蔦精地桂様紋又ハ星大サ二分斗丸龍大サ八分計一両に紋あり

富田　上代四百年ばかり地色大蛇に同じ金糸にて一房宛の雲但し大雲小クモとて二品あり或ハ雲に寶づくしの交りたるもあり同じ中にて金地なる段

留金とも云

瑠璃桐　極上代七百年斗花色地金の入子菱あり
桐のトウ桐の大サ二寸計之

蝶紋　地色大概に同し蝶の模様あり同二ッも銀紋あり

狗石畳　上代四百余年地色白茶色萌黄紫石畳
の内に寳尽くしあり

花麒麟　上代四百年斗あり紺ビロウド又茶色又白
地なと麒麟色大サ一寸斗の麒麟花をくはへて居る

東大寺　極上代五百年余紺地一寸五分斗の紋の丸
に寳尽しあり

建仁寺　地合安楽庵と同し萌黄地丹地模様唐草

唐花蔓(ツル)ニ木よりよくるにあり又紫地萌黄浅黄地あり地
合富田のごとく横筋し建仁寺に竹物有系不持の薄布
袋の表具切あり

花兎　極上代五百年余あり紫地に地茶色地萌黄地
地紋花と兎模様大小あり大の方八一寸二分四方あり
小さ方八八分程あり

滑銭　地色いろいろしあり小牡丹唐草滑銭の紋あり

繻子地をよしとす

鴛鴦　極上代四百年余花色萌黄ニ海波あり鴛鴦

本国寺ともいふ

弘林寺　白地角紋の極品とも云 卍 折入あり

角龍　上代四百年計地色白紺茶色にて角龍
紋大サ八分ばかり
栗山　丹地紹茶角龍大サ四分
筒井　地色濃紅模様系大きし 模様全地ニ紹茶の龍の
ごとく二寸計葉の入りて龍中ニ龍二ツ有り 其小蔓
石畳あり
野田　桃色地小さき遠嶋模様ばかり銀
本願寺　上代四百年計白地小牡丹唐草霰流し
紫大ブリあり全唐草し
雲鶴　茶地角の中ニ雲鶴有り 其地ニ箔網のごとく
小雲有り

ワクタ　上代四百年ばかり白地流水鷺水草雲龍
丸紋出し二ツ之龍有り
木の下　上代四百年計薄桃色地又ワクタ同地もあ
角倉　ビロウド地ありかり花色紹茶色の耳立ちてあり
地ウスク唐物と見てかゝる紹物あり 紹土大サ一寸二三分計
地薄花色有り
二ヶ寺　上代四百年ばかり紋又地又縫地二重ツル
大サ八分計の牡丹唐草
東山　地色白地模様コイ紋色又紺地いろいろ有り
牡丹 武者草　唐草のもありあり
権之夫　同代二百年計萌黄地又紋地もあり地

紋大サ一寸の餅抜なり
緞子鞁　紺地繻子地の様に見ゆる物なりまゝ鞁
の輪違ひの間に剣先有り
大成菱　紺地菱ありて菱の内にも金文ありて世上に大成
菱と云ふ更紗の内に紋有る紋以て地文萌黄白紫
茶藍なり
大内桐　極上代四百年ばかり地文紫白花色茶
有り紋桐唐草桐の大サ横二三寸ばかりなり蔓ツル古
葵有り枝無
義隆　上代四百年計繻子地白赤萌黄地金にて桐の
トウ大サ又分ちなり上紋の様に鳳凰有り大サ一寸計

○一説に唐桐横唐草大内桐ちり紋大く葵多し
信長時代に渡る切なり針屋控右夫と同時なり
大黒屋　紫色黒トビ繻子地小牡丹唐草葵なし
坂内屋　浅黄地ありて大黒屋と同じ
針屋　白地緞紋大サ一寸四又分時代二三百年計之
糸屋　上代二三百年餘白花色地紋サヒクヅレ金まて
九の内に向梅
紹智　時代三百年計白地金の花兎地紋紅杢目
世に麦藁ワラスジ有り此切信長時代に渡ると云
四座　白赤花色浅黄萌黄立筋金唐草梅鉢
統爪　上代六百年計白地地紋菱の内万字上紋に

金襴あり
火燈口　地色紺茶萌黄ヒロウド地合逢坂緞子に似たり上手なり模様惣金地にして火燈口程ツヽの襴の紋あり大サ長八分横六分或ハ火燈口の内も色模様あり是に模様大小あり大の方地味薄く文薄し小の方一段上品なり
細川　紺地唐花○一説に祥雲ち切の小模様と細川と云
釼先　花色又萌黄紋金にて釼先二方へ入違其間に丸龍あり上代凡百年計
荒磯　コイ花色地浪に鯉大サ一寸余黄緞地浪絲もあり上代二百年余

祥雲ち　紫地唐花折枝地に綾紋あり
安楽庵　地色萌黄丹地茶色紋雲龍寶薄くし人形同代二百余年組し文字ある同代かし若し
奈良　紫地笹リンドウ渦(ウヅ)雲組し萌黄地八蜀江なかもあり
ミる野　地合同代安楽庵と同じ地色丹地なかなか牡丹
唐草　蓮華牡丹のなかり中牡丹と替りし
舟越角龍　打地組し金地の模様に丸ぬ多あり白モミ綾杖上紋龍のツメ同代三百年ぐらいし
御朱印　地は繻子地の模様に丸曲れあり紋花赤にて雲へり金又金にて雲の丸内に福寿の字あり地厚し

織留の方ゟハ金にて小さき雲に続けたり上代四百年計

枝切　紫地大煙の大に立枝けたる段々

焼切　アマカハ船持渡の品煙指地色さまざまあり

朱座切　白地二重蓮菱

清水切　花色地梅の折枝に香

蜀金　地色茶地紋金小菱上紋カゲの丸内に龍乃丸又獅子牡丹丸大サさし渡し二三寸の余○地組ゴロのもあり又茶色に石竹万字折入菱など綱(ゴロ)にも金入模に蜀金もあり○驚壷の袋八代切之極上代四百年餘

千體佛　蜀金の上品なり

牡丹　大中小　地色さまざまあり

モウル　地色浅黄萌黄金銀など様々紅色もあり

綱地　地色さまざまあり鳳凰唐子牡丹天人唐草

○銀襴

興福寺　濃紫地寶珠の内に寶尽し大サ二寸ばかり五ツ目に居たるあり極上代五百年餘

ナデシコ　萌黄地撫子あり花ぐるま又四ツ目に居たる大サ又小なるもあり

道言　萌黄地地紋化去もあり

花種　萌黄地に化去角龍又鶴臥もあり

イチゴ　薄萌黄地小鎌紋

黄緞　上手(テ)の物は大内桐に紛(マガ)ふ

○純子

白極　藍ミル茶浅黄紋ゟタスキ霰ほくし極上代七百年餘○白極ハ東山殿の鞁ありしが純子を拝領の鞁袋あり

宗甚　花色地紋浅黄にて大サ七八分程乃輪違ひの内に霰あし極上代六百年餘

下妻　地色コビ茶地合厚くありて白極におなじ上代二三百年餘○下妻少進より出し切あり

正法寺　地糸白極におなじ唐草桔梗霰ほくし撫採定家に似たり極上代又百年餘

本能寺　藍地浅黄にて海波桔梗唐草宝ほくし二三雲屋に似たり極上代又百年餘

藤種　落花色地紋綾にて浅黄二重蔓の内に梅鉢又万字コボレ梅もあり時代二三百年余

鈍先　黄唐茶地紋黒ケシサキもありて上代四百年余

楊場　落栫地とも紋龍の丸

有楽　藍地白又キ油煙形の中に種又細の雲ある龍雲に白龍有時代二百余年

笹蔓　地色玉虫落葡萄黄又黄唐茶笹唐艸に松笠の入たるもあり上代二三百年餘

珠光　花色地とも紋コイむ色紋に人〃ご唐子雨龍

なり。松屋肩衝の袋。徐熙鷺の表具。世上より
珠光緞子といふハ唐艸寶づくし龍の紋なる代にて
同じ間道花色トモ紋を後珠光といふ時代
三百年餘
渦(ウヅ) 藍ビロウド地同色スコシ渦紋モク目く。捩
色の地にウズの紋ありなる代上手とれ又玉子地
に萌黄の浮紋茘枝の中なるもあり上代三百
年餘なり
紹鴎 花色地黄唐茶ヌキ唐艸龍時代二百年余
利休 花色地茶のヌキ梅鉢
宗佐 花色地萌黄ヌキ唐草純珠光なり大揃

なり時代紹鴎と同し
道古 花色地浅黄丁子唐草上代三百年餘上
手の純子なり
遠州 花色紋又かまり石畳の中に花輪違ひ又寶
尽し大石畳白浮紋撚子時代二百年餘
亡羊 花色地黄唐茶茘枝鳳凰大サ七八分
なるあり時代二百年餘。三宅亡羊の羽織といふ縫も
ありといへども疑ふべし亡羊好の唐織なるべし
定家 むら色地茶ヌキ桔梗唐草。京師島原の定
家といふ妓女の衣裳といふ時代四百年余
住吉 蘇枋サメ紋萌黄カラ茶四分むらの鱗形と

上代二百年余

三雲屋　茶色にサメ黄唐茶紋ある海波唐花寶尽し
りゆう本能ちとおふじ

帯刀　花色地白紋タテワキの内に九曜あり時代八
二百年余あり

青羽　紫色地紋は滝に桜の花又輪違に折菱の模様
有其間に寶尽しもあり時代二百年余

襷櫻　樺(カバ)茶地又藍ミル茶襷の腰板ぬい目にも紋
の色落萌黄あり時代二百年餘

蜀紗 帛紗の系下にもあり　地厚落ち南極にありりゆう多くある紫系
また人物鳥獣さまざまあり模様しまた文字もあり

鎌倉

○漢島(カントウ)

赤色モヘギ茶さまざまあり竪ミマカんきよにて
地合吉野と同し廉子もあり極上代七百年餘
鎌倉遠長ものかミキの切といふ

鶴ヶ岡　鎌倉の通りにて赤白あり縞云

吉野　地色コキ萌黄コビ茶にて格子は白かなくり竪
口分なくりの赤白乃丹り鶴の紋ある有り間六七分計
あり上代二百年余

弥三右衛門　鎌倉のごとく茶黒等の竪横縞の紬にて
但し紫系にてナ、コありあるは上にて黒あり横に浮スジの
多きあるは上品とす弥三右衛門の時分よりある代中頃云

上代又百年余

弥吉濤　地赤格子竪ニ二筋格子もあり地合少し
太めに見ゆ紙抱なり

太子　地赤ニてカスリあり

望月　コゲ茶地藍竪横共西もあり花色の下ニ
あり伐紙合ども云上代三百年余

青木　地色不加なり花色模様茶白黒モヘギ白糸乃
浮紋上代二百年余○小松とも云も同抱なり

中尾　地赤ニ糸縞小格子藍中筋あり弥三右衛
なり細(コマ)かなる紙ども云

日野　地合木綿竪又色の糸小格子之時代二百年余

姫路　赤ニ小紋　其外藍ニマ

舟越　伊予大縞同し

保蘇　茶色地ニ紺筋の縞あり又は紺く横筋
浮織あり中古百年余

紹鴎　白紺木綿ニヤガ縞赤糸ニて全糸八サニて共西
のあるを上とすなり時代二百年余

宮内　絹縞ニて下品なる紙抱なり地色赤ス二ル茶
の縞あり幅一寸むかり横共西あり幅三分計上代
三百年余

シゞラ　藍と赤と二筋竪横縞地ニシゞラチヾミ共西ニ
中古百年余

クルリ　渡唐の織出しとも云ひ又渡唐とも定め難し

〇錦

蜀江　地組厚く二重織なり色どり多く何れも佳し

二重金の模様に見ゆるが蜀江の縫箔ヅカヒなり極上代

七百年餘

綴（つゞれ）　織物にて何れも望の細き芋模様を能き糸にてさせし

やうなる織物なりしに表なり

有栖川　紅毛物と云ふ模様多くいろ〳〵あり上代二百年餘

朝鮮　高麗にて織るを云

〇海黄　時代三百年餘

無地　萌黄又紫のヌキ黒地ハ紅糸のヌキなり

紋海黄　梅折枝　雲形　葉　地文さま〳〵何れもモヽサイ

葉モヘギコビ茶樹葉紺地等なり

〇印金

色ハ　紫　花色　萌黄　薄柿　浅黄　茶　白

模様ハ　牡丹唐草　花兎　水草　花鳥　押分とも

何れも時代四百年ばかり

高麗印金　見しれハ古印金にまがふ地色模様さま〴〵

何れも時代二百年余

奈良　南都にて造る物と云又典目ハ金色の兆典目

自画の懸物乃表装に絵の具にてかきたるを云

〇紗

〇茶道筌蹄巻之四

時代紗　古金襴同時代と云ホラ地とよと次煌絲唐草多し紫花色萌黄茶浅黄白多く有り

石山紗　石山寺戸帳の類とぞ云

縫紗　色糸にして縫の入たるを云なり

竹屋町　古織の好にて唐人縫に遣りたる物と云〇一説に泉州堺の竹屋町にて唐人の縫たる物とも云今ハ尾州にて製す竹屋町と云も尾州の地名なりと云竹屋町と云ハ何ニても縫たる物なり

錢屋　鴈金屋　百年来京師にて仕込みたる物也高稲なども其人の屋号を云なり

紀　無紋地にしてなじみ有り堅横とも二ヨリ糸なり

カベチヨロ　地名なり

北絹　其うしろ指列ひをかけやさしきなり徐巡の路の上下色あるなり

襴絹　深地ニなりて其形紋にて有なり

褂　かさちやうなり

右之内印金　紗　䌫の類ハ袋ニ茶不用表具切ニ

茶道筌蹄巻之四　終